



大学と地域の文化施設との連携 ～歴史文化を活かしたまちづくりを目指して～



第67回北海道地区大学図書館協議会講演
於：小樽商科大学

2017年8月18日（金）高野宏康（小樽商科大学）

はじめに

自己紹介

研究テーマ

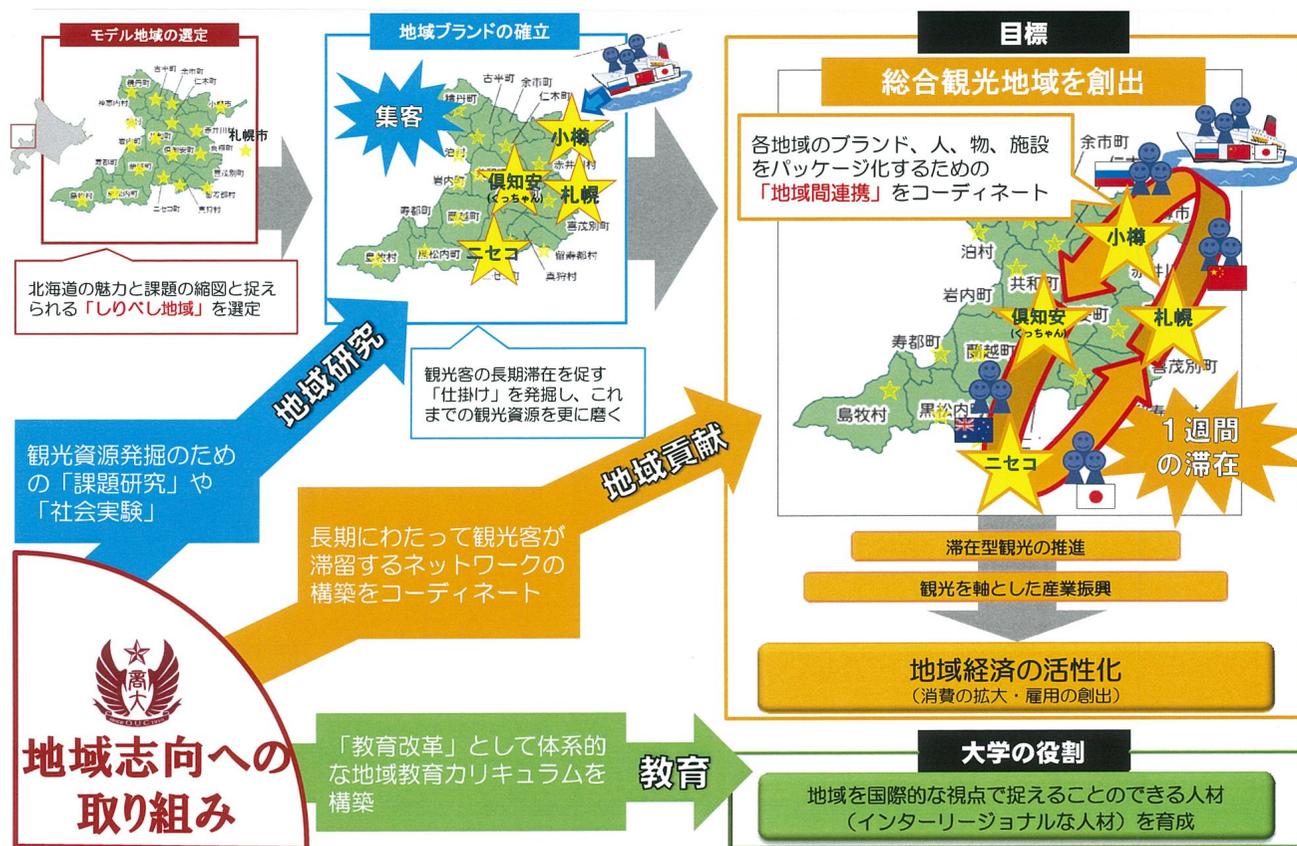
- ▶ 小樽・後志の歴史文化の発掘と地域資源化
- ▶ 地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）の一環で小樽市内の各種文化施設と連携
- ▶ 地域経済研究部、本気プロ（社会連携実践）等、大学の地域連携関連の取り組みに関わる



小樽商科大学 地（知）の拠点整備事業（H25～）

地域と共創する北海道地域活性化モデルと人材育成

- ▶ 「地域研究」「地域貢献」「教育」がキーワード
「地域経済の活性化」「地域人材の育成」を実現



大学COC事業
自治体と連携して地域の課題解決に取り組む
大学を国が支援し、地域コミュニティの中核的存在としての大学の機能強化を図る

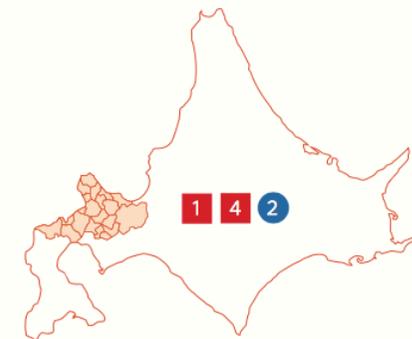
平成 28 年度 小樽商科大学地域志向型教育研究プロジェクト一覧

【研究分野】

- 1 北海道を世界に発信するための英語表記の実態調査
- 2 ニセコ観光局プロジェクト協議会（倶知安町、ニセコ町）との連携による、長期滞在型観光に関する調査・研究【継続】
- 3 余市町における観光を主軸とした地域経済活性化に関する調査・研究【継続】
- 4 キャラクターでつなげる地域の輪プロジェクト【継続】
- 5 観光資源開発としての小樽市立病院・医療ツーリズム事業の実現可能性調査【継続】
- 6 Google Map APIを利用したおたるウォーキングマップ・アプリの開発に向けて
- 7 小樽・後志地域における北前船の歴史的価値の観光資源化【継続】



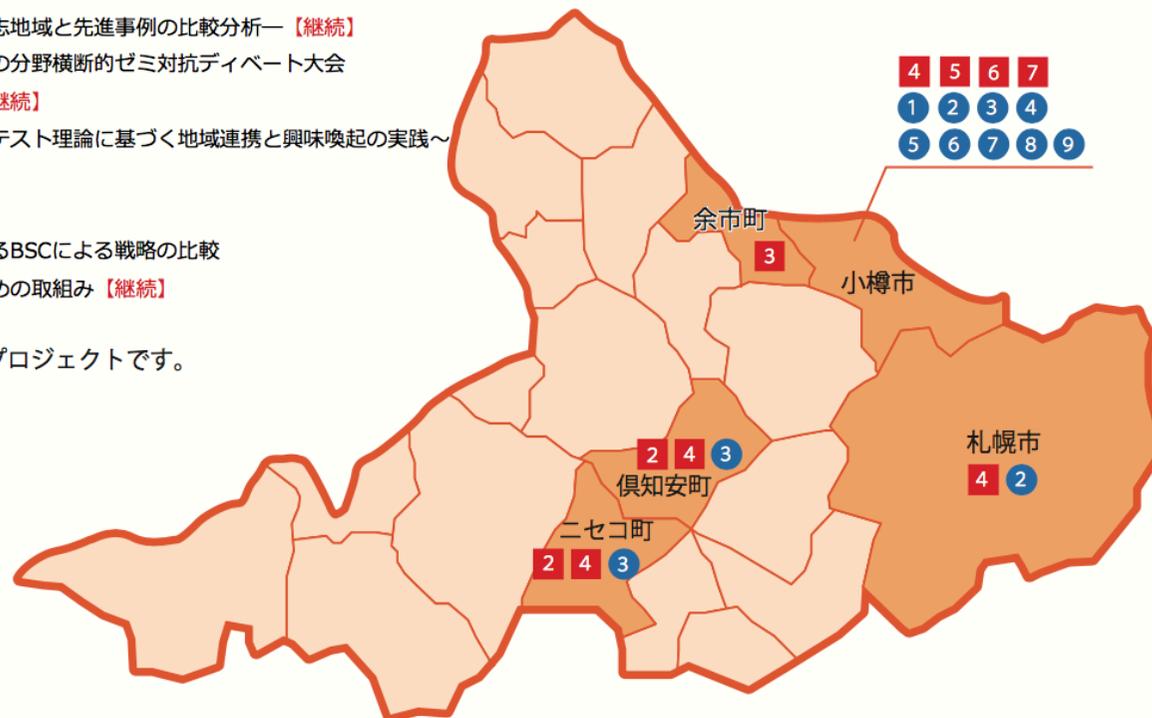
後志地域全体



北海道全体

【教育分野】

- 1 旧国鉄手宮線で巡る外国人観光客のための小樽散策マップ作成プロジェクト
- 2 地域企業の成長戦略に関するケーススタディと企業家教育—後志地域と先進事例の比較分析—【継続】
- 3 地域の問題を知り、討論を通じて解決のきっかけを考えるための分野横断的ゼミ対抗ディベート大会
- 4 歴史的建造物保存・活用のためのファンド形成プロジェクト【継続】
- 5 「しりべし一般教養テスト」の作題を通じた地域理解の試み〜テスト理論に基づく地域連携と興味喚起の実践〜
- 6 後志地域の情報を「効果的」かつ「継続的」に伝える方法
- 7 小樽・後志におけるヒューマンストーリーの発掘と地域資源化
- 8 (株)小樽水族館公社および(株)北海道マリンパークにおけるBSCによる戦略の比較
- 9 外国語表示の拡大等を通じた、おたる水族館の利便性向上のための取組み【継続】



※【継続】については、平成 27 年度に引き続き採択されたプロジェクトです。

小樽の現状と課題

- 近代以降、国際貿易港として飛躍的に発展し、急激に衰退
1960年代には人口約20万人程度 その後人口減少
* 人口119,611人（平成29年7月末現在）
- 小樽の歴史文化の再発見 昭和40～50年代「運河保存論争」
歴史的建造物の観光まちづくりへ活用の先進地
- 経済都市から観光都市へ 現在、観光客年間約800万人
小樽観光のイメージ確立（1980年代以降）

<課題>

観光ルート固定化、滞在時間延長、ホスピタリティ
新たな観光資源発掘、住みやすさと観光都市の両立

小樽についてのストーリー（物語）のわかりくさ
→歴史文化を小樽のアイデンティティに（日本遺産認定の推進）



小樽商科大学COCシンポジウム 歴史文化を活かした広域連携・観光まちづくりイベント

小樽商科大学 COC シンポジウム  地(知)の拠点

北前船と小樽・後志

～歴史的価値と観光資源化を考える～

2017年3月4日(土)
時間：14:00～17:00 (開場 13:30)
会場：小樽経済センター 7階
定員：80名 / **参加費**：無料
申込締切：3月2日まで (定員になり次第終了)

■ 開会挨拶：和田 健夫 (小樽商科大学学長)
 ■ 司会進行：北川 泰治郎 (小樽商科大学グローバル戦略推進センター准教授)
 ■ 趣旨説明：高野 宏康 (小樽商科大学グローバル戦略推進センター学術研究員)





船政寺金比羅殿の船絵馬



神楽内村 弁財洞

第1部 | 北前船の歴史的価値 14:10～15:10 (各30分)

土屋 周三 (元小樽市総合博物館長、北海道北前船調査会主宰)
 「北海道からみた北前船」
 高野 宏康 (小樽商科大学グローバル戦略推進センター学術研究員)
 「小樽・後志における北前船研究と観光資源化の課題」

第2部 | 地域観光資源としての北前船 15:15～16:00 (各15分)

志摩 洋一 (北陸銀行取締役常務執行役員) 「北前船と北陸銀行」
 白鳥 陽子 (UNGA1プロデューサー) + 株式会社フレンセル 「北前船をモチーフとした小樽ブランド」
 森本 恵美 (株式会社スリーエス社長) 「北前船ヒストリーツーリズムの可能性」

第3部 | パネルディスカッション 16:10～17:00 (50分)

テーマ：北前船の歴史的価値と観光資源化を考える
 ファシリテーター：大津 晶 (小樽商科大学社会科学情報学准教授)

【注】小樽商科大学グローバル戦略推進センター 【共催】北海道北前船調査会
 【後援】小樽市、小樽市教育委員会、小樽商工会議所、(一社)小樽青年会議所、(一社)北海道中小企業家同友会しりべし、小樽支店、(一社)小樽観光協会
 NPO法人OBM、北海道後志総合振興局、(公)北海道観光振興機構、(株)北陸銀行、北海道新聞社小樽支店、読売新聞社小樽支店、朝日新聞北海道支社

お申し込み
お問合わせ

国立大学法人小樽商科大学グローバル戦略推進センター
 〒047-8501 小樽市緑3-5-21 TEL: 0134-27-5290 FAX: 0134-27-5293
 E-mail: cbcjimu@office.otan-u.ac.jp URL: http://office.cbc-s.otan-u.ac.jp
 ※お申し込み方法：ご氏名・ご連絡先を FAX または Eメールでお知らせください

地(知)の拠点

小樽商科大学COCシンポジウム

「マッサン」後の広域観光を考える

～ゆかりの地、竹原・大阪・余市の取り組みから～
 (新幹線開業を見据えた誘客促進)

日時 平成27年3月29日(日) 13:30-17:00
会場 余市経済センター **無料** 定員 80名

スケジュール

13:30～ **開会挨拶** 小樽商科大学 副学長 鈴木 将史 **来賓挨拶** 余市町長 嶋保 氏

【第一部】 基調講演

13:35～ 竹原市の観光資源としての竹鶴政孝と竹鶴酒造
 竹原郷土文化研究会 坂上 紀之 氏

【第二部】 各地の取り組み

14:20～ **報告1** 竹原市「マッサン」推進委員会の取り組み
 竹原市「マッサン」推進委員会委員長 山田 智嗣 氏

14:40～ **報告2** 大阪市・住吉区の「マッサン」関連の取り組み
 大阪市住吉区役所教育文化課 松永 貴美 氏

15:00～ **報告3** 余市町での「マッサン」関連の取り組み
 「マッサン」応援推進協議会 事務局長 小林 英二 氏

15:20～ **活動紹介** 「マッサン」を通じた地域活性化の取り組み
 小樽商科大学マシプロ「コンテンツツーリズムの推進」チーム

15:30～ 休憩 (10分)

【第三部】 パネルディスカッション 「マッサン」後の広域観光について

15:40～ **ファシリテーター** 一般社団法人札幌・北海道コンテンツ戦略機構 佐藤 栄一 氏
パネリスト 後志総合振興局 観光戦略室長 柿崎 仁 氏
 竹原市「マッサン」推進委員会 委員長 山田 智嗣 氏
 大阪市住吉区役所教育文化課 松永 貴美 氏
 「マッサン」応援推進協議会 事務局長 小林 英二 氏

16:55～ **閉会挨拶** 「マッサン」応援推進協議会副会長・余市観光協会会長 小田 寛 氏
司会 高野 宏康 (小樽商科大学) **進行** 宮崎 義久 (小樽商科大学)

主催：小樽商科大学ビジネス創造センター / 共催：余市町、「マッサン」応援推進協議会 / 後援：後志総合振興局、小樽市、(株)北海道新聞社、読売新聞社

「マッサン」関連の地域振興（2014～2015年） （本気プロ、サークル、自治体、企業と連携）



良い知だヨ！全員集合



シャッターアート



北海道物産展



プディングケーキ完成



プディングケーキ実物



リタさん誕生日イベント



パネル展



クレインズブーケ
考案者：荒谷 沙織さん



ご当地ハイボール
クレインズブーケ



ご当地ハイボールステッカー



エリーパペット

展示パネル（竹鶴夫妻と小樽・余市のゆかり）

小樽での政孝とリタの足跡



花園銀座街の賑わい（昭和初期） 絵巻書



電氣館 1914(大正3)年に活動写真館として開館。リタはしばしば映画を観に来ていました。小樽の映画館は昭和30年代に急激に増加し、23館に達しました。



カフェ リタは同店の紅茶を好んでいました。政孝は、当時「小樽が一番美味しい」と言われていたシュークリームが好物でした。



米華堂 政孝、リタが訪れていた喫茶・洋菓子店。政孝はアップルパイが好物で、お土産に持って帰ることもありました。



中央市場 1956(昭和31)年に鉄筋コンクリート造の建物になる前の内部の様子。政孝は食材を買いに訪れていました。

政孝とリタが余市で暮らしていた昭和初期から昭和30年代頃にかけて、小樽は活気あふれる大都会であり、二人は仕事や買い物などでよく訪れていました。政孝は取引先の住友銀行小樽支店を訪れた際や、札幌方面からの帰りに小樽に立ち寄っていました。中央市場や三角市場、妙見市場、入船市場などで買い物をし、小樽の老舗喫茶・洋菓子店、米華堂、館（やかた）、あまとうでくつろぎ、大和屋などのお寿司屋さんで食事を楽しんでいました。

リタは同じ宗派である小樽聖公会をしばしば訪れており、礼拝後、宣教師アン・ステープリーとお茶を飲みながら長時間英語で会話していました。また、小樽高等商業学校（現・小樽商科大学）の外国人教師・太黒マナドとも親しく交流しており、友人たちと一緒に、当時小樽で最大の売場面積を誇った百貨店・丸井今井などで買い物をしていました。リタは小樽でパーマをかけていました。当時の小樽は、余市や周辺地域に暮らす人たちにとって、モダンな都市文化を享受できる魅力的な街でした。

写真提供：小樽総合博物館、館（やかた）、米華堂、小樽中央市場組合

国立大学法人小樽商科大学 地(物)の拠点

余市と小樽の政孝・リタゆかりの地

余市

余市町立歴史民俗資料館
余市町立歴史民俗資料館は、余市町の歴史と文化を伝えるための施設です。資料館には、余市町の歴史に関する資料や、余市町の文化に関する資料が展示されています。

余市町立歴史民俗資料館
余市町立歴史民俗資料館は、余市町の歴史と文化を伝えるための施設です。資料館には、余市町の歴史に関する資料や、余市町の文化に関する資料が展示されています。

余市町立歴史民俗資料館
余市町立歴史民俗資料館は、余市町の歴史と文化を伝えるための施設です。資料館には、余市町の歴史に関する資料や、余市町の文化に関する資料が展示されています。

小樽

小樽市立歴史民俗資料館
小樽市立歴史民俗資料館は、小樽市の歴史と文化を伝えるための施設です。資料館には、小樽市の歴史に関する資料や、小樽市の文化に関する資料が展示されています。

小樽市立歴史民俗資料館
小樽市立歴史民俗資料館は、小樽市の歴史と文化を伝えるための施設です。資料館には、小樽市の歴史に関する資料や、小樽市の文化に関する資料が展示されています。

小樽市立歴史民俗資料館
小樽市立歴史民俗資料館は、小樽市の歴史と文化を伝えるための施設です。資料館には、小樽市の歴史に関する資料や、小樽市の文化に関する資料が展示されています。

写真提供：小樽中央市場、大和屋

国立大学法人小樽商科大学 地(物)の拠点

小樽の歴史文化に関する学生との取り組み (地域志向型授業、サークルとの連携)

小樽のひとに学ぶ

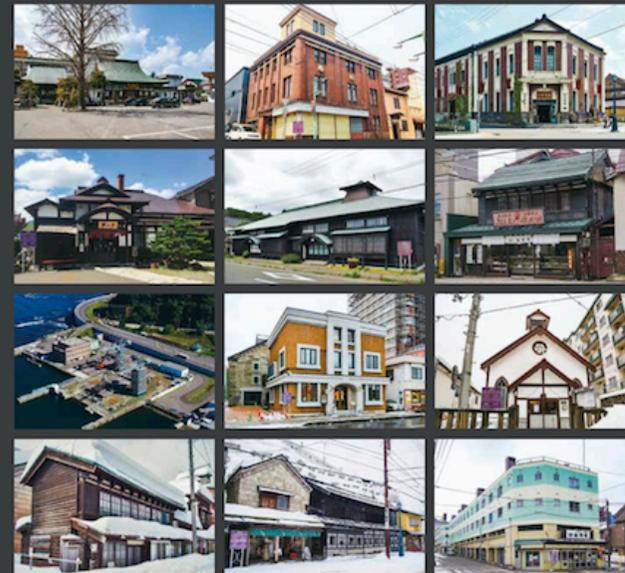
 小樽商大生が
小樽のひとにインタビュー



国立大学法人小樽商科大学  文部科学省
地(知)の拠点

 小樽れっけん

小樽の歴史的建造物ものがたり



国立大学法人小樽商科大学  文部科学省
地(知)の拠点 × 

インタビュー記事 小樽市総合博物館長・石川直章さん

小樽のひとに学ぶ ～ 小樽高生が小樽のひとにインタビュー ～

博物館長から見た 小樽らしさ

いしかわ 直章さん
小樽市総合博物館長



プロフィール
昭和31(1956)年、静岡県浜松市生まれ。昭和56年、同志社大学文学部卒業後、同大学院文学研究科博士課程に進修。同62年、単位取得退学。その後、同志社国際高校の教員、同大資料室調査員を兼務。平成5(1993)年、小樽市教育委員兼社会教育文化係として茨橋25年、博物館法特別調査員受任。同27年、小樽市総合博物館長に就任。

今回、私たちは小樽市総合博物館の館長、石川直章さんにお話を伺った。館長の目線から見た小樽らしさと、博物館長としての仕事について取材させていただいた。

石川さんは昭和31年生まれ、静岡県浜松市の出身である。京都の同志社大学文学部に入学し、大学時代に北海道に来る機会が何度かあったという。平成5年に小樽市教育委員会社会教育文化係として小樽に着任した。

市民の一人ひとりがプライドを持つまち

小樽に来た時の感想を教えてください。

石川さん…私が小樽に初めてきたのは実は学生時代なんです。所属していた大学の研究室の顧問に現場に誘われて北海道の博物館をいろいろと回ったときに小樽にも立ち寄りまして。その頃運河はまだ掘り立てられる前でもまだ臭かったころですね(笑)。いい意味でも悪い意味でも市民の一人ひとりがプライドを持っているという印象でした。

過去の栄光を忘れられないまち

石川さんから見ると小樽らしさは、

石川さん…今の私たちの感じている小樽らしさと50年前の小樽らしとは全く違うと思うんですね。20年前は銭湯、お餅屋さん、市場がやたらと

が多く分かった。

『郷土文化』第41号(2010年)「小樽市総合博物館 副館長・学芸員 石川直章さん」
『小樽』2010年11月号「Interview」小樽市総合博物館学芸員兼調査員 石川直章さん 記事監修 藤原 正(2010年11月発行)



小樽市総合博物館運河館。多数の資料が保管されているため、石川館長は運河館にすることが多い。



小樽市総合博物館運河館内でのインタビュー

チーム02
巻頭 紹介：藤原 将博、山崎 誠真、山下 諒

らとりあえず博物館に電話をして聞けばいい！となるように思われたら大成功ですね。

市民にとって欠かせない博物館を目指して
― 展示以外にもイベントや行事を行っていると思いますが、その際気を付けていることは何ですか。
石川さん…安全第1です。それにつきます。イベントの際にはたくさんの方が集まるので中でも一番気を付けるのはノロウイルスやインフルエンザなどの感染症です。また野外講座も常に事故に気を配っています。私たちは年間講座を60件、80件行っています。つまり月に5〜8回イベントを行っていることになります。これは他の博物館と比べると多いですね。従業員みなやる気があり、次はこれをやりたいあれをやりたいと聞かないんです。でも、私はこれを機力止めないようにしています。これで博物館の存在が市民にとって欠かせないものになってくると思っているからです。

まとめ

― 今回のインタビューを通して新たに小樽というものの見方がかなり変わった。また博物館のイメージは大きく変わった。特に石川さんが強調していた何かあったら博物館に！というのが印象的であった。小樽とともに博物館が成長しているということ

多いと感じました。また対面販売っていうのが本州の方ではあまりなくて、妻が困惑していました。そんな小樽らしさというのは過去の栄光が忘れられないところにあると思います。それは小樽の人たちの人間性から伝わってきますね。札幌なんて…というところから話し始める人が多くいんですね。札幌は文化がなくて小樽が発祥だなど思っている人も多いです。でも、裏を返すとそれはみんな小樽が大好きなんです。小樽の企画をやると地元の人がたくさん集まります。そういうところも小樽らしいと思います。

館長になって最も力を入れていること

― では次にお仕事についてお聞きします。館長になつて一番力を入れている活動は何ですか。

石川さん…博物館の存続について危険意識をもっています。小樽の財政が厳しくなつて博物館を廃止することになった場合、市民が反対するような強い市民意識を作ることが大切で、一番力を入れている活動です。博物館は展示だけではなく、何でもできる、小樽のことに分らないこと、何があつた時に聞いたらなんでも答えてくれるといった意識を市民の人にもつてもらえる様に努力しています。私の希望としては博物館を普段から使つてほしいですね。わからないことがあつた

インタビュー記事 市立小樽文学館長・玉川薫さん

小樽のひとに学ぶ ～ 小樽西大生が小樽のひとにインタビュー ～

小樽と市立小樽文学館

たまがわ 薫さん
市立小樽文学館館長



プロフィール
昭和28(1953)年、福井県福井市生まれ。福井県立藤原高等学校卒業後、北海道大学文学部へ進学。昭和52年、東京の医学書局の出版部に就職するも、「書えが」一つの理念には向かないことを再認識。昭和54年、前年に開館した市立小樽文学館の学芸員となる。平成26(2014)年、副館長となる。

今回、私たちは小樽文学館の館長である玉川さんにお話を伺った。小樽の文学についてはもちろん、玉川さんのユニークな価値観と人間性にも触れることができた。

北海道の土地や気候のイメージに惹かれて

―堀井から北海道に来た経緯をお聞かせください。
玉川さん…北海道の広い土地や気候のイメージに惹かれたため、特に何をしようといった明確な目的があるわけはありませんでした。札幌に住んでいる間、小樽についてはあまり意識していませんでしたが、就職前に行ってみたとき、札幌とは違う不思議な感じがありました。まるで古い時代のミニチュアであるような時間、時間が止まったパラレルワールドでした。一方、五年間住んだ札幌は整然とした街並みで、面白みがなく小樽とは対照的でした。

小樽ならいいかな

―就職は最初は出版社で、それから文学館に移っていますが、その経緯をお聞かせください。
玉川さん…自分でできることは小さな出版社でコツコツと本を作ることだと思いました。編集者養成学校に通い、探し回って見つけたのが「メジカルビュー」でした。しかし、医学書専門の出版社とい

うこともあり、自分のやりたいことは違うと感じ、自分の意見を活かせるところにいきたいと思っていました。そのころ小樽文学館が学芸員の募集を始め、北海道に戻る気はなかったけど、小樽ならいいかなと思いついて、試験を受けに行きました。

文学館にふさわしい建物

―この文学館の建物はかなり年季の入ったような印象ですが、歴史のあるものなのですか。
玉川さん…この建物は僕が就職する前からそのままの姿なので愛着があります。この建物は、昭和27年(1952)年に戦後初めての鉄筋コンクリートが使われた最先端の建物だったんです。この建物を設計した小坂秀雄は、明るく広々とし、わかりやすく単純で重みを感じさせない造りの建物をつくる建築家です。そして彼は建物に個性を出すことなく、自分がつくったというサインもしない。そのよさな一から十までシンプルな小坂秀雄の思想そのものが好きでそれこそが文学館にふさわしいと思いました。

小樽の文学は現実を見ている

―長年小樽で暮らしている中で、小樽の文学の特徴など分かってきたことはありますか。
玉川さん…正直今でもあまりよくわかっていない

こともあり(笑)。小樽は商人の町だったこともあり、現実を見ているという印象でした。小林多喜二なんかは小樽らしいですね。

ドネーション制は欧米をヒントに

―小樽文学館は古本屋とコピーのドネーション制がとても特徴的ですが、取り入れる経緯などはあったのでしょうか。
玉川さん…ドネーション制は欧米では一般的で、そこからヒントを得ました。文学館に好んでいく人はいないと思っています。文学館は美術館などと比べてマイナーな存在ですが、自分がお客さんの立場なら「日中文学のみを鑑賞するよう

な場所は嫌ですね。その点ドネーション制度は文学を味わった人が自分で値段をつけられる制度なのでお客さんは面白がってくれるし、そもそもそれが文学館本来の姿だと思っています。

若い人との偶然的な出会いを待っている

―最後に、これからの自分のこと、文学館のことを考えていることはありますか。
玉川さん…自分は33歳であるので、走り回ったり楽しみながらやってくれる若い人がとにかくほしいですね。偶然的な出会いを待っています。それが今、一番心をしています。

―玉川さんのフェイスブックでは、好きな言葉について楽観的なことが書いてあるのを拝見しました。どのような思いであのような言葉を選んだのですか。
玉川さん…偶然とか失敗とかはそういうものだと思えば気が楽になります。嫌なことも含めて人生です。後悔なんてするものではない。とりあえず生き延びることから。

まとめ

―今回インタビューをして思ったことは、玉川さんは文学や小樽に対する様々な思いを抱いているということである。また、玉川さんのユーモアあふれる発想や楽観的な思考は私たちも見習いたいものであった。また機会があれば話を伺ってみたい、そんな風に感じたインタビューであった。

参考資料①「おぼろ」玉川薫さん 北海道新聞 2010年11月23日
参考資料②「おぼろ」玉川薫さん 北海道新聞 2010年11月23日
参考資料③「おぼろ」玉川薫さん 北海道新聞 2010年11月23日
参考資料④「おぼろ」玉川薫さん 北海道新聞 2010年11月23日
参考資料⑤「おぼろ」玉川薫さん 北海道新聞 2010年11月23日



チーム16
村口雄大・美馬真生・森快樹・百井彰



シヨリとドネーション制を取入れた暖かみのある開放的な空間で、居心地が良い。



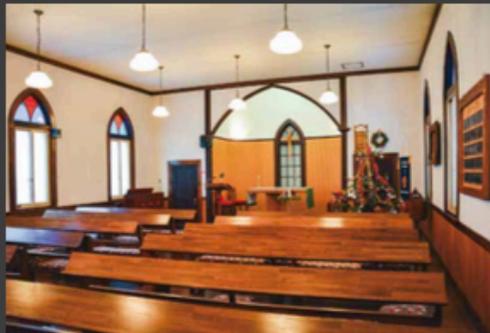
旧宮脇助地に隣接する文学館。歴史を感じさせる建物は当時の最先端の技術で建てられた。
【上】旧宮脇
【下】文学館建物



写真撮影を依頼してくださった玉川さん。「文学館のなかで守り続けたいのは写真 OK。著作権の侵害にはなりませんよ。」

歴史的建造物の物語を発掘 写真部と連携 (『小樽チャンネルMagazine』連載中)

おたる・しりべしの魅力を発掘する小樽商科大学



礼拝堂内部。長椅子や調度品は建築当時の面影をとどめている。

小樽聖公会（小樽市東雲町10-5）
明治41（1908）年、建築。木造平家、建物の中心軸に切り妻の3つの屋根（玄関、母屋、尖塔）が並び、屋根に鐘撞堂をのせている。玄関脇の窓は左右対称に配置され、星形模様のパラ窓、やや幅広い尖塔アーチ窓が特徴的。軒のレース状の装飾はアメリカで流行したカーペーター・ゴシックの特徴を示す。軒先にはシンプルな飾り破風板がついており、玄関上部は和風建築にみられる懸魚のようになっている。外壁は下見板張り。平成3（1991）年、小樽市指定歴史的建造物（第28号）に指定。



尖塔アーチ窓のステンドグラス。鮮やかな青と赤が印象的。



鐘撞堂。鐘は昭和7～9年に「聖鐘基金」の積立金で購入した。戦時期に供出され方不明となっていたが、戦後、小樽港の倉庫内で発見された。



星形模様のパラ窓、軒のレース状の装飾、懸魚風の飾り破風板が特徴的。



オルガン。「オルガン基金」の募金によって購入されたもの。最近補修された。



洗礼盤。十字架と三位一体の意匠が施されている。



手前から小樽聖公会、本妙寺、水天宮の鳥居。様々な宗教施設が集まっている。



小樽の歴史と深く関わる人物たちとゆかりを持つ教会

水天宮の丘の中央にあり、小樽の街を見下ろすように建っている清らかな教会が、小樽聖公会である。近年マツシンの美竹リタが通っていた教会であることが判明し、メディアで紹介されるようになった。リタ以外にもこの教会は小樽の歴史と深く関わる様々な人物とゆかりを持つ。

聖公会は英国国教会系統の教派で、カトリックとプロテスタントの中間的な派系と言われる。明治13（1880）年、北海道で宣教を開始。小樽では同28年に田町で小樽聖公会事務所として創設された。小樽聖公会信徒第一号は同35年に受洗した小樽駅宿小樽町三代目局長の井高虎であった。

明治13年6月に小樽初の伝道を行ったのが、アイヌ伝道士ジョン・バチエラー（1854-1944）である。英国聖公会のシリングとバチエラーは日露・石狩地方のアイヌ伝道の嚆矢で、教会を主催したバチエラーは、小樽聖公会で明治35年、40年、大正10（1921）年の3度宣道長を務めている。

環本武雄らが所有する小樽の土著開拓を推進した北松社の三代目支配人として知られる寺田常雄（1877-1942）は、小樽聖公会と深い関わりを持っていた。寺田は明治31年から36年まで小樽聖公会の教区委員を務め、総務部事務所に新設された教会所屬の済美女学校を創設している。

校の幹事となっている。石川啄木の妹ミツ（1888-1964）は明治40年5月、盛岡から次郎の婚約者であった小樽に向かい、短期日本文藝誌「小樽」で教会で洗礼を受けた。この頃ミツは小樽聖公会でオルガンの手ほどきを受けたと言われる。同42年夏、ミツは小樽聖公会の小児会の世話人の助手として働くようになった。大正2年から西宮の聖公会系の教会や修業に仕立、同11年には聖公会司祭に任職した。

小樽聖公会は小樽高等商業学校（現小樽商大）とも関係が深い。小樽商大の創設者・木村重雄は、昭和6（1931）年から16年まで小樽聖公会の教区委員を務めた。竹輪リタの友人だったアン・ステューブリー（1898-1965）は、昭和10年5月に若狭、小樽商大と英語学研究会を開始し、多数の学生が聖公会を創設した。

小樽聖公会は、小樽市指定歴史的建造物に指定され、歴史系なども積極的に建築当時の面影が濃厚に感じられる魅力的な建物だが、様々な人物とのゆかりが、当時、教会が近代文化の発信地であり、小樽の歴史に深く関わっていたことをいまに伝えている。

撮影：白石 飛王 写真部 小樽科大有意会
取材：真由 小樽科大有意会
文責：藤原 小樽科大有意会

【参考文献】『日本聖公会 小樽聖公会二十年の歩み』（2000年）『小樽の歴史（1）』『小樽の歴史（2）』『小樽の歴史（3）』『小樽の歴史（4）』『小樽の歴史（5）』『小樽の歴史（6）』『小樽の歴史（7）』『小樽の歴史（8）』『小樽の歴史（9）』『小樽の歴史（10）』『小樽の歴史（11）』『小樽の歴史（12）』『小樽の歴史（13）』『小樽の歴史（14）』『小樽の歴史（15）』『小樽の歴史（16）』『小樽の歴史（17）』『小樽の歴史（18）』『小樽の歴史（19）』『小樽の歴史（20）』『小樽の歴史（21）』『小樽の歴史（22）』『小樽の歴史（23）』『小樽の歴史（24）』『小樽の歴史（25）』『小樽の歴史（26）』『小樽の歴史（27）』『小樽の歴史（28）』『小樽の歴史（29）』『小樽の歴史（30）』『小樽の歴史（31）』『小樽の歴史（32）』『小樽の歴史（33）』『小樽の歴史（34）』『小樽の歴史（35）』『小樽の歴史（36）』『小樽の歴史（37）』『小樽の歴史（38）』『小樽の歴史（39）』『小樽の歴史（40）』『小樽の歴史（41）』『小樽の歴史（42）』『小樽の歴史（43）』『小樽の歴史（44）』『小樽の歴史（45）』『小樽の歴史（46）』『小樽の歴史（47）』『小樽の歴史（48）』『小樽の歴史（49）』『小樽の歴史（50）』

パネル展示（市立小樽図書館、小樽駅など）



本気プロ（社会連携実践）

- ▶ 商大生が小樽の活性化について本気で考えるプロジェクト（社会連携実践）
- ▶ 博物館、美術館、文学館、図書館など、小樽市内の各種機関との連携プロジェクトを実施



本気プロ2016夏／冬 中間発表会

発表プロジェクト 『小樽観光地のユニバーサルデザイン』『小樽ブランドを活かした新たな商品開発』
『市立小樽図書館の活性化』

2016.11.8

16:10-17:40（開場16:00） 

本学3号館 2F グローカルラウンジII

本気プロ2017冬／夏の説明会もおこないます。

【問い合わせ】本学5号館2F ALサポートセンター TEL/0134-27-5479（担当：小山田）



小樽市内の文化施設との連携

- ▶ 歴史文化を活かした地域振興の各種プロジェクトを進める中で、**市内の文化施設との連携**が重要に
 - ▶ 小樽市総合博物館、市立小樽文学館、市立小樽美術館、市立小樽図書館など。**各施設のニーズ・課題**に応じた具体的な連携事業を実施
 - ▶ 各施設から商大に、認知度向上（プロモーション）、学生の協力、各施設間の連携、調査研究などのニーズあり
 - ▶ 商大から各施設には、地域資源の保存・活用、スペース利用、教育など各種ニーズあり。商大生は市内の文化施設をあまり認識していない
-



樽商大と市教委が協定

博物館など3館 地域活性化へ連携



協定書の調印後、握手する和田健夫学長
(右)と上林猛教育長

小樽商大と、小樽市総合博物館など3館を所管する市教委は24日、互いに協力して地域活性化を目指す連携協定を同館本館(手宮1)で結び、和田健夫学長と上林猛教育長が協定書に調印した。

地域に貢献する人材育成、同館と市立小樽文学館、市立小樽美術館の発展、学術振興が目的。地域志向を打ち出す同大が今年4月、共同での事業実施を打診したことがきっかけだ。

連携事項として、樽商大

の学生が3館で研究などを行うことや、同大の講義に学芸員を講師として派遣するなど盛り込んだ。

調印後、和田学長は3館の膨大な資料などを念頭に「埋もれている資源を観光資源として生かせないか。研究をしていきたい」と強調した。同大と市には既に包括連携協定があるが、上林教育長は「個別の協定で、より密接な連携が図れる」と期待を込めた。

今回の協定の有効期間は2016年3月末までで、

両者からの申し出がない限り、1年ごとの自動更新となる。
(田子由紀)

北海道新聞(2014年9月25日付)

包括連携協定（博物館施設と商大：2014年）

- ▶ 小樽市総合博物館、市立小樽文学館、市立小樽美術館（博物館施設）と小樽商大との協定
 - ▶ 講師派遣に関すること
 - ▶ 博物館施設における学部学生の講義の受入
 - ▶ 博物館活動の推進・発展に関すること
 - ▶ 小樽市及び後志地域の発展に関する歴史遺産の発掘・活用に関すること
 - ▶ その他相互に連携協力することが必要と認められる事項に関すること
-



①小樽市総合博物館との連携

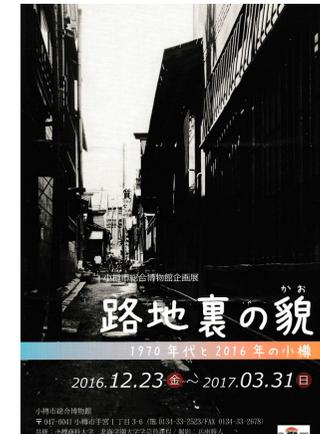
地域経済研究部との調査研究協力（2014年～）

- ▶ 菓子喫茶文化、尼港事件、北前船、その他
- ▶ 博物館収蔵資料の利用（画像、実物資料等）



小樽の地域資源の保存・活用（2014年～）

- ▶ 廃業した店舗、商店街の資料など 例：梅月の看板



特別展「路地裏の貌～1970年代と2016年の小樽」（2016年）

- ▶ NPO法人E-GAOと博物館、北海学園大学学芸員育成コースの連携
- ▶ 博物館所蔵写真「兵庫コレクション」関連展示



地域資料の発見 尼港事件関係資料（犠牲者名簿など、2016年）

道総合 30 12版

「尼港事件」名簿見つかる 小樽の寺 犠牲者600人分、現場写真も

ロシア極東で1920年（大正9年）に起きた「尼港事件」に関して、殺害された日本の軍人・民間人のうち約600人分の手書き名簿や現場写真、慰霊行事の関連文書などが小樽市の寺に保管されていたことがわかった。小樽商科大の高野宏康・学術研究員（歴史民俗資料学）が詳細を調べており、今後、一般公開される可能性もある。

尼港事件は、ロシア革命や日米英仏によるシベリア出兵など、不安定な国情の中で起きた惨事。日本軍が占領した都市ニコラエフスク（尼港）をパルチザン（非正規部隊）が攻撃し、700人余りの日本人と多数のロシア人市民が殺された。

当時の小樽港は、ロシア極東方面への交通・物流の要所で、犠牲者は小樽から渡航した人々だった。痛ましい出来事に小樽市民の間で同情の声が高まり、市は24年、国に要請して遺灰を受け入れた。市を挙げて慰霊行事が行われ、遺灰は手宮公園に設けられた納骨塔に安置された。公園の追悼碑の前では1世紀近く過ぎた今も、法要が毎年行われている。

見つかった名簿などは、小樽仏教会が、正林寺（高島）と誓願寺（祝津）の2か所に保管していた。名簿は「尼港派遣隊戦死者名簿」と「大正九年 尼港事変殉難者名簿」の2冊。高野研究員は「遺灰受け入れの時に小樽で作ったものではないか」と推測する。民間人の出身地は熊本県天草地方が多いという。

事件前後の写真は約70点で、惨殺の現場や、「大正九年五月二十四日午後12時忘ルナ」と壁に書かれた文字を写したものもある。慰霊行事の関連では、24年に遺灰を小樽に移す際の軍関係者のあいさつを書いた奉書紙が残っており、「小樽市民悲愁最モ多シ」「其熱誠ニ感激シ……」などこぼれられている。

高野研究員は「尼港事件と小樽の深い関わりを物語る貴重な資料。豪商が私財で霊場を整備するなど、市

尼港事件の死者の名簿と、慰霊行事の写真を伝える2冊の名簿



読売新聞（北海道版、2016年10月17日付）



地域資源調査

高島特攻艇基地の現地調査（2016年）



地域資料の保存 (中華料理店「梅月」の看板、2014年)



地域資料の保存 (梁川商店街のタペストリー、2015年)



小樽市総合博物館と商大の連携の特徴

- ▶ 地域資源の保存・活用 博物館は圧倒的な資料情報を有しており、保存・管理できる施設
- ▶ 博物館は、現在も継続中（商店街や会社、店舗、事業、まつりなど）についての情報は得られにくい傾向あり
- ▶ 博物館は、負の歴史（戦争、鉱山労働、遊郭など）についての情報については今後の課題となっている
- ▶ 膨大な資料を駆使した展示企画は学生の協力が有効

★博物館、商大のそれぞれの「強み」を活かした連携



②市立小樽文学館との連携

地域経済研究部とのコラボ展（2015年）



- ▶ パネル展「小樽ゆかりの文学作家と小さな鉄道の旅をしよう！」
JR小樽駅コンコース

早川三代治展（2016年）＊本学ゆかりの文学者・経済学者

- ▶ 市立小樽文学館、附属図書館、地域経済研究部が連携
- ▶ 特別展、パネル展、講演会等の開催 資料調査

地域経済研究部との調査研究協力

- ▶ 小林多喜二・伊藤整ゆかりの喫茶「越治」の写真発見
- ▶ 小林多喜二の死をモチーフにした絵画の発見



市立小樽文学館との連携 パネル展「小樽ゆかりの作家と小さい鉄道の旅をしよう」(2015年)

伊藤整・通学列車の青春

伊藤整は、庁立小樽中学校(現・小樽潮陵高校)に入学してまもなく、実家のある塩谷から小樽まで汽車通学を始めます。この通学列車のなかで余市から通う青年や少女と親しくなります。その一人の上級生から借りた『島崎藤村詩集』に、たいへん感動したことが、伊藤整の人生を決定づけました。生涯の親友もこの列車で知り合い、少女たちとの恋愛もこの列車のなかで始まるのです。



小樽市塩谷「コロダの丘」に建つ伊藤整文学碑

伊藤整の故郷・塩谷村

伊藤整は明治38(1905)年1月、北海道松前生まれ。父は広島県出身の軍人で退役後、教員や塩谷村役場の収入役などを務めました。一家は伊藤整1歳のとき塩谷村に移ります。忍路郡塩谷村(現・小樽市塩谷)に鉄道が通ったのは明治36(1903)年で、翌年に函館までの全線が開通しました。塩谷尋常小学校を卒業後、庁立小樽中学校に入学、初め小樽に下宿しますが、大正8(1919)年7月、中学3年の夏に余市と中央小樽間に通学列車が運転されることになり、このときから下宿をやめ、塩谷村の自宅から通うこととなります。

文学への目覚め

余市・中央小樽間の通学列車は朝は1本、帰りの時間も2本ぐらいで、余市や塩谷から小樽に通う学生どうしや、ときには勤め人とのあいだにも会話が生まれました。やがてそれは、彼に重要な出会いをもたらすこととなりました。いちばん運命的だったのは、二年先輩の鈴木重道(のちの歌人・北見恂吉)との出会いで、彼が貸してくれた『藤村詩集』によって、整は初めて、詩の言葉が持つ美しさに深く心打たれ、文学に文字通り開眼したのです。大正11(1922)年4月、整は、小樽高等商業学校(現・小樽商科大学)に進学しました。一方で詩への熱中の度合いはより一層深まり、萩原朔太郎や堀口大学の訳詩集、さらにアイルランドの詩人イエーツの作品などを読みふけりました。

友情と恋愛



庁立小樽中学生の頃の伊藤整(右)中央は整に『藤村詩集』を貸し与え、文学開眼に導いた鈴木重道

通学列車のなかでは新たな出会いもありました。余市に在りて、当時小樽の貯金局に勤めていた文学青年、川崎昇です。伊藤整は川崎昇が編集していた雑誌『青空』の同人に加わり、詩や評論を寄せました。また雑誌の資金を作るため、小樽高商附属実践工場で作られた「高商石鹸」を仕入れ、二人で公園通りに露店を出し、その石鹸と、塩谷や忍路でとった蕃葱やハマナスを売りもしました。川崎昇が下宿していた小樽駅近くの映画館・電気館裏の衣斐賣店の二階で二人は売り上げの計算をしたり、伊藤整が自費で出そうとしている詩集について相談しました。この通学列車には余市や間島から小樽の女学校へ通う女学生たちも乗り合わせており、伊藤整は彼女たちに思いを寄せたり、その一人と恋愛関係をもつようになります。こうした情感がやがて伊藤整の青春詩集『雲明りの路』に結晶していくのです。



文学や恋愛を語り合った親友川崎昇の下宿先・衣斐賣店(当時)



© 五山美術

国立大学法人 小樽商科大学 地〈知〉の拠点整備事業

銀行員・小林多喜二の通勤

明治40(1907)年、秋田県大館から移住した小林多喜二(当時4歳)の一家は、現在の小樽築港駅のすぐそばでパン屋を営みました。小樽高等商業学校(現・小樽商科大学)を卒業して、北海道拓殖銀行小樽支店に就職した多喜二は、小樽築港駅から色内駅まで手宮線通勤しました。



移住間もないころの小林一家。右から2人目多喜二

小林多喜二が育った家

秋田県大館の小林家はもと由緒ある豊かな地主の家でしたが、伯父の投機的な事業失敗などで没落します。その伯父が小樽に滞り小林三屋堂という店を開きました。パン工場を旭見谷から新富町に移し、日露戦争中小樽港に停泊した海軍に下るす御用達のパン屋となり成功。多喜二一家を呼び寄せます。小林家の人々は戦後の小樽という大きな可能性のある新天地に望みをつないだのです。多喜二一家が店を出した若竹町では、明治41(1908)年の5月から北防波堤に次ぐ第二期築港工事が始まり、続いて大規模な埋立がはじまり、漁師町だった若竹町が変貌していきます。水産学校の生徒などにもパンがよく売れました。その当時の工事では前近代的な監獄部制度という奴隷労働があり、夜中に悲鳴が聞えるようなこともありました。学生の頃の習作に、現場の監督が労働者に加える残酷な制裁を生々しく描いた「人を殺す犬」があります。

旧北海道拓殖銀行小樽支店

大正12(1923)年建築。現・ホテルヴィブラントオタル。建築当時の外観をほぼ保ち、2階まで吹き抜けのホールに6本の古典的円柱がカウンターに沿って立つ内部も、銀行時代の偉容を留めています。小林多喜二は小樽高等商業学校を卒業し、大正13(1924)年から6年間、拓殖銀行小樽支店に勤務しました。入行後もなく、かつて文芸誌をともに作った同人に新しい仲間を迎えて、雑誌「クラルテ」を創刊します。このころから多喜二は多忙な仕事の合間を見てノートの原稿帳をつくり、つぎつぎと新しい作品に取り組み、改作と推敲を重ねます。作品は、学生生活や恋愛をテーマにしたものから、やがて貸ししいげられた民衆の現実を視点を集中していきました。

手宮線色内駅

色内駅は、1912年(大正元年)8月11日、手宮線に開設された最後の旅客専用駅です。当時この周辺は日本銀行小樽支店をはじめ多くの金融機関が軒を連ねた商都小樽の中核でした。1924年(大正13年)小樽高等商業学校を卒業し、北海道拓殖銀行小樽支店に勤めた小林多喜二は、若竹町の自宅近くの小樽築港駅から乗車、この色内駅で下車して銀行に通ったのです。小林多喜二の代表作『蟹工船』『不在地主』などは、この銀行員時代に執筆されたものです。



旧北海道拓殖銀行小樽支店



旧手宮線色内駅跡



『蟹工船』を書いた頃、若竹町の自宅で



© 五山美術

国立大学法人 小樽商科大学 地〈知〉の拠点整備事業

小林多喜二・伊藤整ゆかりの喫茶「越治」



読売新聞(小樽後志版、2016年2月9日付)

③市立小樽美術館との連携

美術館特別展のプロモーション支援（2014年～2015年）

- ▶ 大学院生（MBA2年生）がブログで特別展の情報発信や顧客満足度調査を実施（特別展「色彩の饗宴 巨匠たちの絵とパレット」、特別展「小樽運河・いまむかし」）

本気プロ「小樽美術館の振興」チーム（2014年）

- ▶ 美術館、すぎのこ保育園との連携イベント

地域経済研究部の調査研究・展示協力

- ▶ 特別展「小樽運河・いまむかし展」（2015年）
- ▶ 特別展「おたる潮まつり50周年記念まつり写真展」（2016年）
- ▶ 地域経済研究部が資料調査、パネル作成等に協力



市立小樽美術館との連携（本気プロ）

すぎのこアートピクニック（2014年10月22日）

- ▶ 市立小樽美術館、小樽すぎのこ保育園、本気プロの連携イベント 特別展「木のおもちゃ展」関連企画
- ▶ 園児25名が美術館まで歩いて（秋のプチ遠足）、秋にちなんだワークショップを実施
- ▶ 園児は4名の商大生と一緒にA4版のベニヤ板上に落ち葉や枝を使って動物を表現
- ▶ 美術館と園児をつなぐ商大生の役割



市立小樽美術館との連携 特別展「小樽運河・いまむかし」 (2015年)



小樽運河・いまむかし
運河保存運動の父・藤森茂男 特陳

2015年4月25日(土)～7月5日(日)

■観覧料 全20～17.00 (歳学入館16.50) ■休館日 月曜日、4/30(水)、5/7(木)、8(金)、12(水)、13(木)
■観覧料 一般400(320)円、高校生・学内高齢者200(160)円、中学生以下無料
※1:18歳以下は大人半額 ※2:1歳～3歳未満は100円

【第1回】 運河の小樽運河
【第2回】 小樽運河への思い 藤森茂男
【第3回】 小樽運河の味

特別陳列「運河保存運動の父・藤森茂男」
【出品作家】 伊藤正一・金子誠治・東平英介・金丸直樹・木崎良治・小平のり子・小竹義夫・小林繁・佐藤孝男
白江三夫・鈴木進一・鈴木博・内江重一・千葉七郎・宮澤謙・中村泰実・若山博雄・吉屋五男・宮川眞
山田義夫・大和屋康・渡辺祐一郎 他

【関連事業】
■展示室講座「夫・藤森茂男と生きた日々」
4月25日(土) 14:00～15:00
藤原陽三(藤森茂男)
■絵画と舞踊のコラボレーション「運河との対峙」
5月9日(土) 14:00～
藤原陽三(藤森茂男)
■ミュージアムコンサート「はるかな国と時代へ旅する」
6月13日(土) 14:00～15:30
札幌コーイ合奏団 指揮/中村隆夫

観覧料・事前予約 0134-34-0035

市立小樽美術館 otaru city museum of art 〒047-0031 小樽市色内1-9-5
Tel:0134-34-0035 Fax:0134-32-2388

共催:北海道新聞小樽支社 UHB北海道文化放送 後援:市立小樽美術館協力会 国立大学法人小樽商科大学ビジネス創造センター 梁川商店街振興組合



- 小樽運河を描いた藤森茂男（1936-87）を軸にした展示
- 藤森茂男は運河保存運動の創設者の一人で、おたる潮まつりの創設に関与するなど、戦後小樽のまちづくりの原点
- 藤森茂男の画廊と自宅は梁川商店街にあり、同商店街と関係が深い商大が美術館と連携を仲介。連携事業に発展

市立小樽美術館・梁川商店街との連携 中央市場での「藤森茂男」展 (2015年)



まつりの熱気を写す写す写す。



おたる潮まつり50周年記念
まつり写真展

写真家(北海道写真協会)
■本橋三利 ■前野邦夫 ■堀田伸敏 ■梶橋敬明 ■太田照二 ■川沢静彦 ■高野幸市 ■林橋浩二 ■小沢和子

潮まつり歴史に尽力した人々
■藤森茂男 ■米谷哲司 ■藤佐麗玉 ■宇野一幸ら

2016年7月9日(土)～9月18日(日)

開館時間/9:30～17:30 休館日/同曜日(ただし7/18は開館)、7/19(水)、20(木)、4/21(金)
観覧料/一般:500円(税込)/高校生・大学生:250円(税込)/中学生以下無料 1:30以上は別途予約

市立小樽美術館
otaru city museum of art

〒047-0031 小樽市色内1丁目9番5号
TEL:0134-34-0015 FAX:0134-41-3188

共催 北海道新聞小樽支社、UHB北海道文化放送
後援 北海道写真協会、国立大学法人小樽医科大学、株式会社月刊おたる、旅行社製作所、市立小樽美術館協力会

潮まつり

潮まつり写真展 (2016)

- ・潮まつり50周年関連企画展。前年の「小樽運河・いまむかし」展がきっかけとなり、資料調査、展示パネル作成などに協力

- ・潮まつりの資料はこれまで収集されず。この機会に多数の資料が確認された

市立小樽美術館と商大の連携の特徴

- ▶ 学生の協力事業（プロモーション、イベントなど）には課題が多い。美術館の役割・利用に対する認識の齟齬など
 - ▶ 美術館展示と関連する商大の歴史文化の資料調査、展示協力は一定の成果をあげることができた
 - ▶ 他の施設、商店街などとの連携に際して商大の仲介により様々な関連事業に発展
-



③市立小樽図書館との連携

COCプロジェクト（2014年～）

- ▶ 「マッサン」等の地域研究・地域振興プロジェクト
- ▶ 図書館内イベント（講演会、パネル展）



本気プロ「小樽図書館の活性化」（2016年）

- ▶ コミュニティとしての図書館 「本×実体験」イベント

本気プロ「小樽図書館と連携したコンテンツツーリズム」
（2017年）

- ▶ 小樽が舞台のマンガ「聖樹のパン」関連企画
-
- ▶

市立小樽図書館100周年事業（2016年）

市立小樽図書館
100周年図書館誕生祭
100th Anniversary

2016 10:00~
10/29(土) 19:00

10:00~
イメージキャラクター・
読書感想画表彰式

11:00~11:45
「たるBOOK」の読み聞かせ

11:00~12:00
石川博物館長ミニ講座
「石川館長小樽を語る」

13:00~14:00
絵本作家こぐれけいすけ氏
親子向け講座&ワークショップ

15:00~16:30
記念講演会 講師：蜂谷涼氏
「明治・大正時代の小樽」

18:00~19:00
琴アンサンブル「カナル」
ライブラリーコンサート

<問合せ先> 市立小樽図書館
〒047-0024 小樽市花園5丁目1-1
TEL 0134-22-7726
<https://otaru.milib.jp/index.html>

- 各種イベント開催（講演会、コンサート、読み聞かせ）
- 展示（100周年のあゆみなど）
- 古地図・古写真デジタルアーカイブ事業
- 図書館イメージキャラクター
- 読書感想画コンテスト
- 子ども一日図書館長
- 図書館探検隊



公立図書館の現状と課題

- ▶ 運営高効率化 直営から民間委託へ
- ▶ 図書館の役割の多様化 地域の課題解決、まちづくり、コミュニティの場としての図書館
- ▶ 図書館の役割の変化 閲覧の時代→貸出の時代を経て、現在は「暮らしに役立つ図書館」
- ▶ 「みんなが集まる、みんなで作る図書館」
- ▶ 課題 図書館イメージの改善（暗い・古い・狭い）
- ▶ さまざまな「連携」を模索



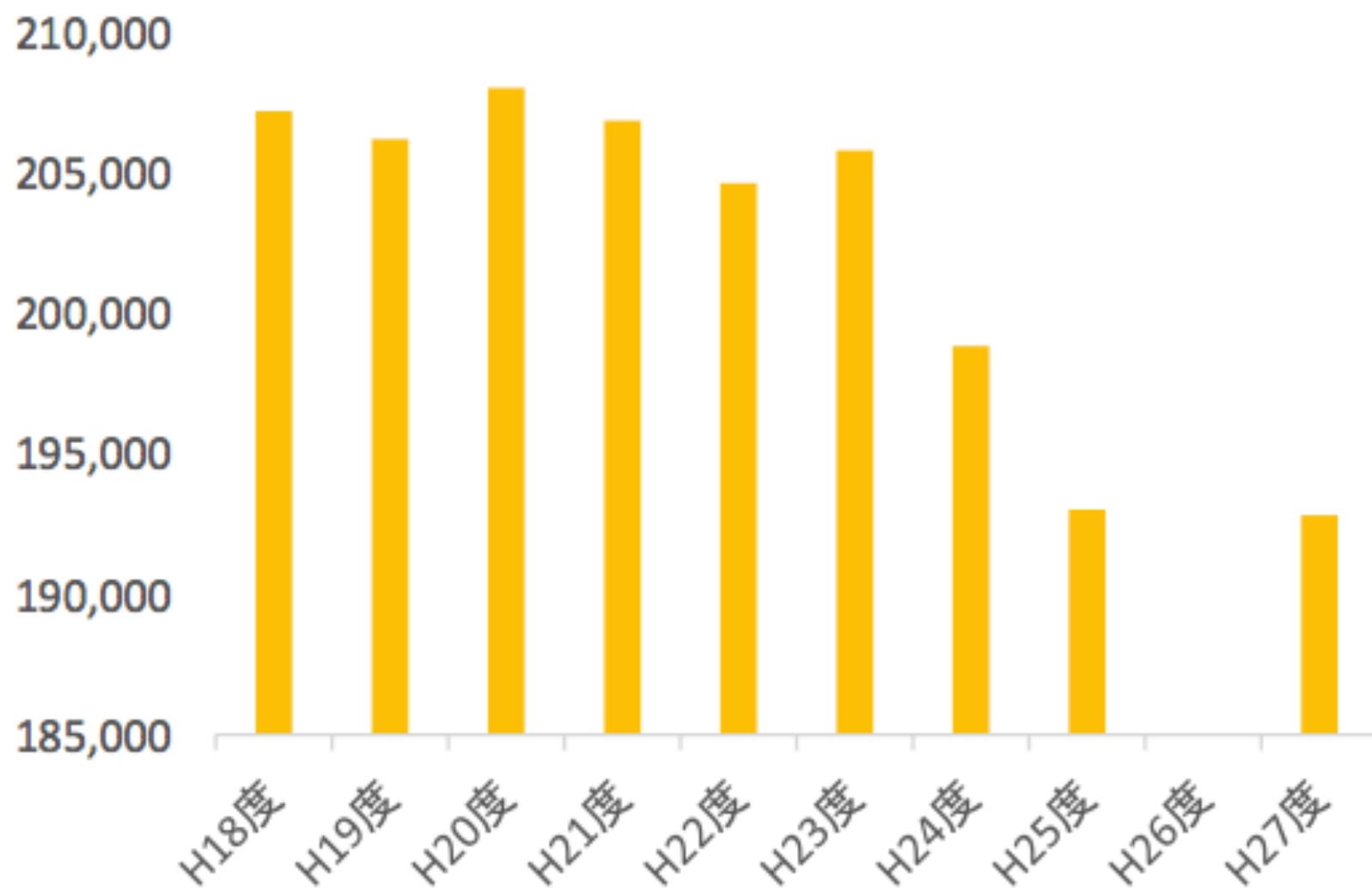
市立小樽図書館のめざすもの

- ▶ 入館者数の減少
- ▶ 利用の低迷
- ▶ 人口一人あたりの貸出冊数 3.02人
- ▶ 道内1万人以上都市の平均 5.02人

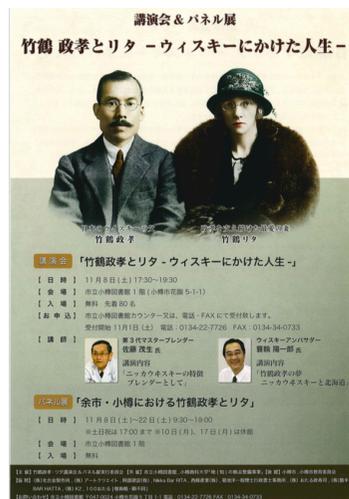
- ▶ 館内の改善、事業見直し、PR強化（FBなど）
- ▶ 学校図書館の支援強化 子ども読書活動は学校支援
- ▶ 他機関との連携強化 たるBOOK、商大など



市立小樽図書館年間入館者数



市立小樽図書館での「マッサン」イベント (2014年)



展示パネル（竹鶴夫妻と小樽・余市のゆかり）

小樽での政孝とリタの足跡



花園銀座街の賑わい（昭和初期） 絵葉書



電気館 1914(大正3)年に活動写真館として開館。リタはしばしば映画を観に来ていました。小樽の映画館は昭和30年代に急激に増加し、23館に達しました。



カフェ OFFICE
リタは同店の紅茶を好んでいました。政孝は、当時「小樽が一番美味しい」と言われていたシュクリームが好物でした。



米華堂 政孝、リタが訪れていた喫茶・洋菓子店。政孝はアップルパイが好物で、お土産に持って帰ることもありました。



中央市場 1956(昭和31)年に鉄筋コンクリート造の建物になる前の内部の様子。政孝は食材を買いに訪れていました。

政孝とリタが余市で暮らしていた昭和初期から昭和30年代頃にかけて、小樽は活気あふれる大都会であり、二人は仕事や買い物などでよく訪れていました。政孝は取引先の住友銀行小樽支店を訪れた際や、札幌方面からの帰りに小樽に立ち寄っていました。中央市場や三角市場、妙見市場、入船市場などで買い物をし、小樽の老舗喫茶・洋菓子店、米華堂、館（やかた）、あまとうでくつろぎ、大和屋などのお寿司屋さんで食事を楽しんでいました。

リタは同じ宗派である小樽聖公会をしばしば訪れており、礼拝後、宣教師アン・ステープリーとお茶を飲みながら長時間英語で会話していました。また、小樽高等商業学校（現・小樽商科大学）の外国人教師・太黒マナドとも親しく交流しており、友人たちと一緒に、当時小樽で最大の売場面積を誇った百貨店・丸井今井などで買い物をしていました。リタは小樽でパーマをかけていました。当時の小樽は、余市や周辺地域に暮らす人たちにとって、モダンな都市文化を享受できる魅力的な街でした。

写真提供：小樽市総合博物館、館・プランシ、米華堂、小樽中央市場組合

国立大学法人小樽商科大学 地(物)の拠点

余市と小樽の政孝・リタゆかりの地

余市

余市町立歴史民俗資料館
余市町立歴史民俗資料館は、余市町の歴史と文化を伝えるための施設です。展示品は、余市町の発展を支えた人々の足跡をたどることができます。

余市町立歴史民俗資料館
余市町の歴史と文化を伝えるための施設です。展示品は、余市町の発展を支えた人々の足跡をたどることができます。

余市町立歴史民俗資料館
余市町の歴史と文化を伝えるための施設です。展示品は、余市町の発展を支えた人々の足跡をたどることができます。

余市町立歴史民俗資料館
余市町の歴史と文化を伝えるための施設です。展示品は、余市町の発展を支えた人々の足跡をたどることができます。

小樽

小樽市立歴史民俗資料館
小樽市の歴史と文化を伝えるための施設です。展示品は、小樽市の発展を支えた人々の足跡をたどることができます。

小樽市立歴史民俗資料館
小樽市の歴史と文化を伝えるための施設です。展示品は、小樽市の発展を支えた人々の足跡をたどることができます。

小樽市立歴史民俗資料館
小樽市の歴史と文化を伝えるための施設です。展示品は、小樽市の発展を支えた人々の足跡をたどることができます。

小樽市立歴史民俗資料館
小樽市の歴史と文化を伝えるための施設です。展示品は、小樽市の発展を支えた人々の足跡をたどることができます。

写真提供：小樽中央市場、大和屋

国立大学法人小樽商科大学 地(物)の拠点

市立小樽図書館との連携 本気プロ「小樽図書館の活性化」イベント

「すいぞくかんがやってくる」

2016年12月11日 水族館×図書館×商大生

- ▶ 絵本読み聞かせ
- ▶ 飼育員によるタッチイベント
- ▶ トランクキットによる生き物紹介
- ▶ 関連絵本の展示



★図書館と水族館の初の
コラボ企画 それぞれの強みを
活かした新たなイベント

図書館と水族館初のコラボ！！

すいぞくかん がやってくる！

2016年12月11日(日)
午前10時から12時まで

市立小樽図書館にて
(小樽市花園5丁目1-1)

参加費！！

図書館に海の生き物(ウニやヒトデなど)がやってきます！
絵本の読み聞かせ後、飼育員さんお話を聞かないお話をしていきます！
実際に生き物に触ることもできます！絵本の水族館もあります！

図書館で海の生き物とふれあってみませんか？

申し込み、お問い合わせは市立小樽図書館の受付カウンター
または電話(0134-22-7720)にてお願いいたします。
しつこく、お名前と年齢、連絡先を記載の上、
mail:library@mail.com またはLINE:libraryを返してください。
(12月9日締切、先着です。)

市立小樽図書館×小樽商科大学本学プロ 市立小樽図書館の活性化プラットフォーム×おきく水族館

協力:おきく水族館・CBEネットグループ



図書館と水族館初のコラボ！！

すいぞくかん がやってくる！

2016年12月11日(日)
午前10時から12時まで

市立小樽図書館にて
(小樽市花園5丁目1-1)

※参加料！！

図書館に海の生き物(ウニやヒトデなど)がやってきます！
絵本の読み聞かせ後、飼育員さんが役目がないお話をしていきます！
実際に生き物に触ることもできます！絵本の水族館もあります！

図書館で海の生き物とふれあってみませんか？

申し込み・お問い合わせは市立小樽図書館の受付カウンター
または電話(0134-22-7726)にてお願いいたします。
もしくは、お名前とご年齢、連絡先を記載の上、
mail: library@gmail.comまでメールをお送りください。
(12月9日締切、先着25名)

市立小樽図書館×小樽商科大学本気プロジェクト 市立小樽図書館の活性化チーム×小樽市の水族館

「ぐりとぐら」 のカステラを 作ってみよう！

2017年1月6日(金)午後2時～4時

小樽市勤労青少年ホーム(緑1丁目9-4)

対象：小学生以下

持ち物：上履き・エプロン・三角巾

定員：先着18名

参加無料



絵本の読み聞かせとゲーム、カステラづくりをします！
親子でご参加ください！！

申し込み・お問い合わせは市立小樽図書館の受付カウンターまたは、電話(0134-22-7726)にて
お問い合わせ(12月27日締切)。もしくは、お子様の名前とご年齢、保護者氏名、連絡先を記載の上、
mail:nc.library@gmail.comまでメールをお送りください(1月3日締切)。

小樽商科大学 本気プロジェクト 市立図書館の活性化チーム×市立小樽図書館

「ぐりとぐら」の世界を体験してみませんか？

「ぐりとぐら」のカステラをつくってみよう

(本気プロ市立小樽図書館の活性化チーム・最終報告資料より)



楽しかったです。
また作りた
いです。

まぜたり卵を
るのが難し
かったです。
でもおいしく
作れたので
よかったです。
家でも作り
たいです。

ぐりとぐら
みたいにお
いしく作
れました。

カステラは
ものすごく
おいしかった
し、手遊び
もすごく楽
しかったです。



- ・本の内容が現実になるのが楽しかった。
- ・母子ともに楽しくおいしく作る事ができて、とても良かった。
- ・「本×実体験」をぜひ続けてほしい。
- ・子どもと一緒にカステラを作り、とても楽しい時間を過ごせた。
- ・普段は読んであげる方だが、一緒に読み聞かせを聞くことができ嬉しかった。
- ・子どもと一緒に作ります。フライパンで焼けたので大感激です。
- ・子どもの頃から一度食べてみたかった「ぐりとぐら」のカステラを作って食べれたので幸せでした。

プロジェクトの体制

すいぞくかんがやってくる！

- おたる水族館
- たるBOOK
- CISEネットワーク

「ぐりとぐら」の
カステラを作ってみよう！

- おたる自然の村
- たるBOOK



期待される定量/定性的効果



- 関係施設・協力団体との繋がり
 - 今後の持続性・発展性
 - 相互間の情報発信→小樽の魅力
- 新たな図書館の活用法をアピール
 - 新規図書館利用者の増加



市立小樽図書館と商大との連携（案）

- ▶ 留学生の自国語による絵本読み聞かせ・歌の紹介
- ▶ 市立病院における一般・子ども向け事業の学生ボランティア
- ▶ 小樽子ども読書の日共催
- ▶ 新入商大生おすすめ本の展示
- ▶ 部活・サークルとの連携



市立小樽図書館と商大との連携（案）

- ▶ 小樽の歴史・郷土資料収集保存の為の連携
- ▶ 資料のデジタル化、データの共有、提供、研究
- ▶ 地域資料の収集・保存の協力
- ▶ 小樽の地域資料の連携展示
- ▶ ビジネス支援 経済・企業情報の提供
- ▶ ワークショップ、研修講演会の開催
- ▶ 資料の分担保存



まとめ

- ▶ 各種の文化施設から学生の役割を高く評価
- ▶ 商大の取り組みが契機となって各施設間の連携を推進したことへの評価 例：図書館と水族館など
- ▶ 各施設のニーズと商大の強みのマッチング、持続可能な仕組みづくりなどがプロジェクトのポイント
- ▶ 各施設の連携は、小樽市の「日本遺産」認定事業や歴史文化基本構想策定事業などにつながる部分あり

